



ななかまど Vol.36

北海道情報大学 学位記授与式



北海道情報大学



写真：平成17年度学位記授与式

目次

■学位記授与式 学長告辞	2	■大学院産官学連携セミナーを開催	16
■学位記授与式	3	■Webデザインコンテスト表彰	17
■野澤先生の逝去を悼む	4~5	■ビジネスプレゼンテーションコンテスト	17
■退職教員あいさつ	6	■江別市プロモーションコンテンツを作成	18
■現代GP ポスターセッション	7	■厚別区新札幌冬まつりに参加	19
■企業アンケート結果	8~10	■映像サークルがダブル受賞	20~21
■平成17年度公開講座修了報告	11	■中国語研修に参加して	22
■特別講演会「国際会計基準の日本経済への影響」	12~13	■同窓生のページ	23
■ハラスメント防止委員会が講演会	12~13	■企業向け大学説明会実施	24
■学生相談室が講演会開催	12~13	■平成17年度就職状況	25
■海外研修報告	14	■ボランティアを通じた様々な出会い	26~27
■ピアサポートルームの使用状況	15	■主要行事等	28



平成17年度 学位記授与式告辞

学長 井野 智



本日、ここに、電子開発学園松尾泰理事長、グループ各社代表の方々、前学長久野光朗先生、同窓会長木村篤詩様をご来賓としてお迎えし、教職員臨席のもと、732名の新学士と、5名の大学院修士課程修了者に、学位記をお渡しすることができました。めでたく本日を迎えました皆さんと、ご家族の皆さんに、北海道情報大学を代表して心よりお慶び申し上げます。

皆さんは、学部あるいは大学院での学業を終え、情報化社会の中心的担い手として、明日からの実社会での生活に、大きな期待と一抹の不安を抱きながら、いま、北海道情報大学を巣立とうとしています。

この機会に、これから皆さんがその一員となり支えてゆく社会の現状と、社会で皆さんは何を行い、どうあるべきかについて、考えてみたいと思います。

1 専門知識の学習・人間形成の継続

日本をふくむ先進諸国では、工業社会から知識社会への移行が進んでいます。皆さんの多くは、IT分野の知識労働者として、現代を担う大きな力となることが期待されています。

知識労働者という耳慣れぬ言葉を遣いましたが、知識労働という仕事は、肉体労働者が習得していない能力、しかも習得することの難しい能力を必要とします。知識が高度になればなるほど、多くの知識労働者が必要となり、労働者一人ひとりのごく限られた分野を担当することになります。

病院を思い浮かべてください。規模の違いはあっても、病院は、診療に関わる医師・看護師、診断に関わる各種検査技師、薬剤師、医療情報管理士など、専門の異なる多くの知識労働者を雇い、組織として成果を持続している、これが知識社会の現状です。

知識が中心的資源となる社会では、知識労働者は、つねに最新の専門知識を吸収し、多くの人々と円滑にコミュニケーションできる教養と人間性を高める努力を継続することが求められています。

2 本学卒業生の実力

北海道情報大学は、本年に入り、1月は札幌、2月には東京で、企業の人事関係者にお集まりいただき、来年度卒業予定の学生の採用をお願いする大学説明会を開催しました。

その折、アンケートをとらせていただきましたが、本学卒業生に対する企業側の評価は、日頃、皆さんと接している教職員には、とても信じられぬ高いものでした。本学で培った皆さんの実力が「皆さん自身が思っているほど低くない」何よりの証拠、ITのプロとして、胸を張って社会人としてのスターとを切ってください。

3 一人前のプロになるには

ただし、就職はしたが続かずに辞めてしまった卒業生

は、企業側の評価対象となっていないことは言うまでもありません。

ある大相撲の親方が「まず辛抱、次が努力、努力できるようになったら、努力を根気よく続けることが大切」と言っています。一人前のプロを目指す心得として、的を射た指摘だと思います。

プロとして一人前になったら、次に目指すは一流、超一流、こうしたプロの心意気を示す私の好きな話があります。

紀元前440年ころ、ギリシャの彫刻家フェイディアスは、アテネのパンテオンの屋根に建つ彫刻群を完成しました。それらは現在でも、西洋最高の彫刻とされていますが、彫刻完成後、フェイディアスの請求書に対し、アテネの会計官は「屋根上の彫刻は背中が見えない。誰にも見えない部分まで彫って、請求してくるとは何ごとか」と言いました。これに対してフェイディアスは「そんなことはない。神々が見ている」と反論しました。

「神々が見ている」と同じ意味で、むかしから日本では「お天道様が見ている」という言葉が遣われ、監督がいなくても、まじめに働き、不正はしないのが日本人でした。しかし、いつからか日本は、多くの人々が勤勉さを失い、さまざまな事件や不祥事が頻発する、情けない国になってしまいました。

他人（ヒト）は騙せても、自分を騙すことはできません。どうか皆さん、「神々」あるいは「お天道様」を「自分」に置きかえ、仕事の場でも、日常生活においても、自ら恥じることのない仕事や生活をしてください。

4 饒の言葉

最近のベストセラーで、斎藤茂太という方が書いた『いい言葉はいい人生をつくる』という本があります。そこには古今東西の多くの格言が載っています。最後に、そのなかの一つ、三宅雪嶺の言葉を紹介します。

“鍛冶屋が腕を振って腕が太くなるように、元気を出し続けると、元気は増してくる”

いい言葉だと思いませんか。“やる気”と“元気”をなくしたら人間はおしまい、くれぐれも健康に留意し、かけ替えのない皆さんの貴重な生涯を、健やかに、豊かに、大切に生き抜いて下さい。

以上、仕事に対する初歩的な心構えなどについて話しました。少しでも記憶に残り、皆さんの今後に役立てば幸いです。

本日、学位記を手にした皆さんの今後の活躍を祈り、学長告辞のむすびとします。

学位記授与式

3月17日(金)午前10時から、
 本学松尾記念館講堂において、
 平成17年度北海道情報大学学位
 記授与式が行われました。

経営情報学部第14回、情報メ
 ディア学部第2回、通信教育部
 第9回、大学院第9回の合同で
 行われた式の模様は、会場に設
 置されたテレビカメラ4台により、
 保護者控室の201教室と204教室、
 そして全国の各教育センターに
 中継されました。

式は、厳粛なうちにも和やか
 な雰囲気の中行われました。
 その後、卒業記念写真撮影、学
 科等別学位記授与、体育館での
 卒業祝賀会と続き、学位記を手
 にした卒業生・修了生たちは、
 大学との別れを惜しんでいました。

なお、学科等別学位記授与では、
 成績優秀者等の学生表彰も併せ
 て行われました。

(総務課)



各
学
科
等
の
代
表
に
学
位
記
を
授
与



祝辞を述べる松尾理事長



- 卒業生
 - ・ 経営情報学部
 - 経営学科 70名
 - 情報学科 90名
 - ・ 情報メディア学部
 - 情報メディア学科 155名
 - ・ 経営情報学部 通信教育部
 - 経営学科 正科生 A 73名
 - 情報学科 正科生 B 344名
- 修了生
 - ・ 経営情報学研究科 5名

情報メディア学部 助教授

心理学博士 野澤 讓治 先生

弔 辞

謹んで故野澤讓治先生の御霊に申し上げます。

少子化時代を迎え、大学の存在意義が大きく問われる中、真の教育者として学生の教育に人一倍力を尽された野澤讓治先生を失い、北海道情報大学は今、深い悲しみの中にあります。

情報メディア学部教員として、また経営情報学部の教養教育も併せて、北海道情報大学のために果たされた大きなご業績の一端にふれ、先生への惜別の辞としたいと存じます。

先生のご専門は認知及び数理心理学であり、心理学、情報社会の心と身体 of 講義やビギナーズセミナー、教養ゼミナールを担当され、わかりやすい語り口で学生に大きな感銘を与えられました。また、クラス担任として、ビギナーズセミナーの担当者として、出席状況の心配りをされ、教養ゼミナールではゼミ生の発表能力の向上にこれ努められ、研究室は常に学生の誰かが訪れ、親身の対応をされました。

日頃はにこやかで、温厚な方でありましたが、先生の教育に関わる資質は誠に丁寧なものでありました。ある時はバドミントン部の顧問教員として、学生と共に汗を流し、ある時は廊下で知る限りの学生に親しみを込めて名前を呼びかけ、近況を訊ね、激励し、と愛情を注ぎ、多くの学生に慕われました。

本学の国際交流委員会委員として、地域社会にも貢献されました。アメリカのパデュー大学修士やダートマス大学博士の経歴を生かして、江別市国際交流推進協議会の理事を務められ、「江別の冬を楽しもう」、「ようこそ江別へ」など江別国際交流の集いの実行委員として、見事なリーダーシップを発揮されました。

先生の教育に対する愛情深いお気持を忘れることなく、残された教職員、学生一丸となって、より良い大学作りに邁進することをご霊前にお約束申し上げ、弔辞と致します。

平成18年1月7日

北海道情報大学学長 井野 智

の逝去を悼む



追悼文

野澤譲治先生はかねて病氣療養中でありましたが、去る1月5日逝去されました。

慎んで野澤先生のご逝去を悼み、大学の同僚を代表してご霊前に告別の辞を捧げます。

名門ダートマス大学のDr.である野澤先生はもともと研究者を希望してその道を歩んでおられましたが、一度、情報大学の教員となるや、まさに水を得た魚のようでありました。卓抜した心理学の学識と教授学、天性の人柄の良さ、なによりも、心底、学生を思う心の優しさはいかなる学生にも信頼と尊敬の気持ちを抱かせるものでありました。行き交う学生とはいつもにこやかに挨拶をしておられました。野澤先生の研究室のドアはいつも開かれており、学生への指導と歓談の声が聞かれ学生が門前市をなしておりました。

私も野澤先生も情報メディア学部開設に先立って2000年の4月に情報大学の教員となりました。以来、何一つ共通点がないように見える私達二人、実験心理学の野澤先生と古典力学の私とは、同僚というよりは学生時代のような親しい友情を結ぶことができました。二人で携えて学生の指導に当たり、多くの学生に道を開いてやることができました。

また、私達は故三本木孝先生の指導の下に学生の教育指導の改善のための学内共同研究を行い、教育環境の物理的条件と心理的条件の整備による教育効果の向上を解明しました。出席管理・小テスト・教材研究について考究し実践されたこの研究により、カリキュラム改革の基本的な方向を提案することができました。これは、新カリキュラムとして実現し、学生相談室へ発展し、就職指導による教育効果の向上をはかる学内LANポータルサイトとしてすばらしい機能を発揮するに至っており、

更なる発展を企画しております。

野澤先生は殊のほか家族思いの方でありまして、私にも折に触れてお母様や妹さんのことを話しておられました。ご家族の方々の野澤先生を喪った悲しみは察するに余りありますが、悲しみを越えて野澤先生のよき思い出を守っていただきたいと願っております。

野澤先生の卓抜した学識と善意に満ちた教育者としての姿勢は、独り北海道情報大学のみならず今日の私学においてよりよい大学教育を実現するための鏡となるものです。私達は、野澤先生の遺志を継ぎ、受け入れた学生に対して大学に相応しい教育を行うことを、いかなる困難を越えても実現する決意です。

私が野澤先生と結んだ友誼に思い出深い感謝を捧げ、心からの哀悼の意を表し、漱石の一句をもって惜別の言葉といたします。

ある程の菊投げ入れよ棺の中 漱石

野澤先生の略歴

- 1951年1月4日 広島県に生まれる。
- 1970年3月 明星学園高校卒業
- 1974年3月 立教大学文学部心理学科卒業
- 1983年3月 立教大学大学院文学研究科博士課程心理学専攻単位取得退学
- 1988年4月 パデュー大学数理心理学専攻修士課程修了
- 1992年6月 ダートマス大学心理学専攻博士課程修了、心理学博士(ダートマス)
- この間、ダートマス大学等において心理学研究の傍ら一時日本に帰国し、北海道大学文学部非常勤講師等を勤める。
- 2000年4月 北海道情報大学助教授着任

情報メディア学部 教授 田城 徹雄

北緯43度東経141度

情報メディア学部
特任教授

吉田 勉弘



ある講義で、長さ1mの単位は地球の子午線の長さの4000万分の1であるが、子午線とは何かと学生に尋ねたことがある。約半数の学生は正解をしたが、残りは答えられないか曖昧な答えが返ってきた。そこで、子午線とさらに本学の位置すなわち緯度と経度を調べさせた。本学は表題の位置にあるが、より精密には北緯43度4分東経141度32分である。ちなみに道庁は北緯43度3分東経141度21分である。このような地球上の位置が分からなくとも、日常には不便を感じられないというか必要はないが、せめて本学がどのような所にあるのか、一度くらいは調べておいても無駄とはならないであろう。

ところで、本学はいうまでもなく、かつて海であった石狩低地帯の野幌丘陵地の野幌森林公園に隣接しており、いうなれば、森林公園が本学のキャンパスのようなものでもあります。ここには、特別天然記念物に指定されている野幌原始林があり、これら樹木に加え、多くの野草やさらにアカゲラをはじめ種々の野鳥が観察されます。また、本学の周辺にあるクルミにはよくエゾリスがその実を求めに走り回っている光景を目にした人も多いことでしょう。新校舎の南西側の湿地には、春になるとフクジュソウ、ミズバショウ、ザゼンソウなどが一斉に咲き誇っております。このような自然に恵まれ閑静な環境のもとで、学問を極めることができる学生諸君は幸運であると言わざるを得ません。本学はまた、古代の遺跡に位置しており、古代人がはせた想いが、情報という最先端の学問を追究する場として発展していることに、不思議な縁が感じられる。大学では勉学に励むことはもとより、この壮大なキャンパスを散策し、疲れた頭を癒し、英気を養うのも大事ではないでしょうか。かつて、井野学長は「美しい景観は人の心を優しくする」と道民カレッジの大学放送講座で述べられております。豊かな自然に取り囲まれた本学で学ぶ学生諸君は、この自然と同様に心も豊かに育ててくれることを希望しております。

我が最終章・今思うこと

情報メディア学部
特任教授

若林 久二



振り返ってみれば情報メディア学部設立一年前の準備期間を経て今春3月までの6年間は短かったようでまた長かったようで、その思いが頭の中を駆け巡っています。大学卒業後東京で二つの企業で34年間をものづくりに終始し、次は北海道での12年間を人づくりに傾注し現在に至った46年間の勤務生活の最終章が本学でした。

思い起こしますと札幌市立高専終了後は東京に戻る予定をしていた矢先、新たに情報メディア学部を立ち上げるので是非協力してほしい旨の要望が前今田事務局長からあり、コンピュータは苦手でしたがこのIT時代に少しでも豊かな感性を育むお手伝いが出来ればとの思いから決心をいたしました。

その間教授経験を五年と一年の特任教授体験をしましたが、私にとってもっとも有意義であったことは初めて経験する大学勤務という教育の場でゼミ生を持ったことです。幸いにも一期生二期生の計24名全員が私のゼミに進みたいという学生に恵まれたことでした。

また残念に思うことは定年退職という期限があったため昨年度は三年生ゼミを受け持つことを断念したことです。大学教育の醍醐味はなんといっても自分のゼミ生を育て世に送り出すことの喜びに尽きるのではないかと思います。そして自身が担当した科目のデザイン概論・芸術論・デッサン基礎・表現メディア演習・そして卒業制作論文である総合演習を履修して来たすべての学生に対し、一教員として感謝の念が湧いてきます。

更に一言付け加えるなら卒業した学生諸君が将来どのように社会に羽ばたいて行くかが楽しみでもあり例えどの道に進もうと人間として、本学の卒業生としての誇りと勇気を失わず立ち向かって行く事を期待します。

そして今まで支えてくださった大学側と教職員の皆様にも心からお礼を申し上げ、今後厳しくなる大学経営の現状の中で特色のある大学として本学がますます発展されることを祈ってやみません。

平成17年度 現代GPフォーラムでの成果発表

経営情報学部 教授 富士 隆

1. 現代GPとは

現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）とは、文部科学省が、国公立大学を通じて学生教育の質の向上などの大学教育改革の取組を選定し、財政的なサポートや幅広い情報提供を行い、各大学などの教育改革の取組を推進するために実施しているものです。具体的には、各種審議会からの提言等、社会的要請の強い政策課題に対応したテーマ設定を行い、各大学・短期大学・高等専門学校から申請された取組の中から、特に優れた教育プロジェクトが選定されます。平成17年度は、509件の申請があり、本学を含む84件が選定されました。

2. ポスターセッションでの発表

現代GPフォーラムは、選定された現代GPの取組内容について、他大学等の教育改革の取組の参考となるよう、社会への情報提供の一環として文部科学省が開催するものです。3月4日（土）、東京ビッグサイトで開催され、本学からは、現代GPプロジェクトのメンバーである、谷川先生、山北先生、ソーラ先生、中居事務局長、富士らが出席しました。

「平成17年度選定取組の紹介」ということで、平成17年度に選定された大学等84件について、ポスターやPCによるデモ等で取組の内容を紹介していました。本学は、「ITによるIT人材育成フレームの構築—学習者適応型e-Learningシステムの開発—」というテーマで発表しました。他大学のe-Learning関連の取組は、教材などコンテンツの開発が中心ですが、本学の取組は、学

習者適応型e-Learningシステムの開発によりIT人材育成の基盤を作るという点で、他大学にない特徴あるプロジェクトであると言えます。e-Learningの仕組みも、学習者のレベルに応じた教材（上級、中級、初級）を提示するSCORM2004を実装し、提示された教材のインタラクティブな問い合わせ機能を有するなど実用化レベルのe-Learningとしては、国内で最先端のシステムとして評価されました。

3. グループディスカッションでの発表

現代GPでは、「地域活性化への貢献（地元密着型、広域展開型）」、「知的財産関連教育の推進」、「仕事で英語が使える日本人の教育」、「人材交流による産学連携教育」、「ニーズに基づく人材育成を目指したe-Learning Programの開発」の各テーマ別にグループディスカッションが行われました。本学は、「ニーズに基づく人材育成を目指したe-Learning Programの開発」のグループで、平成17年度選定校の代表として発表する機会を得ることができました。300人を超える参加者で、いかにe-learningを学生に定着させるかなどの質問がだされ活発な議論がなされました。



今回の現代GPフォーラムに出席し、多くの方々と議論をしていく中で、本学のプロジェクトの優位性を認識することができ、それがプロジェクトメンバーの次へのモチベーションになればと思います。

企業アンケート結果報告

副学長 嘉数 侑昇

平成18年1月20日(札幌会場)と2月20日(東京会場)にて行われた本学の企業向け説明会において、企業の方にご協力いただき、アンケートを回収しました。その結果を集計しましたので、ここに掲載します。関係者各位の参考になれば幸いです。

1. アンケート実施日

札幌会場：平成18年1月19日(木)

東京会場：平成18年2月20日(月)

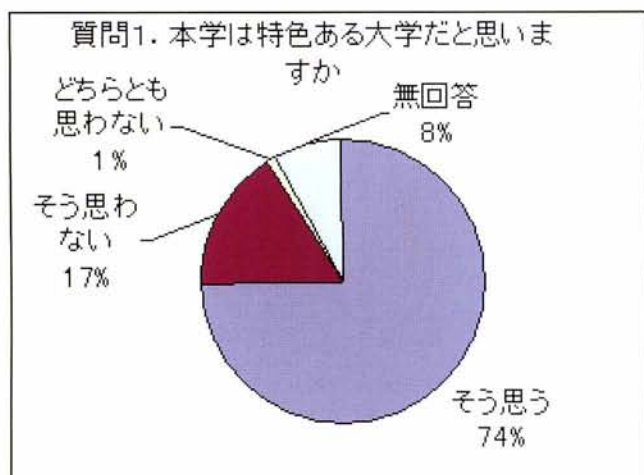
2. 回答数

札幌会場：78社

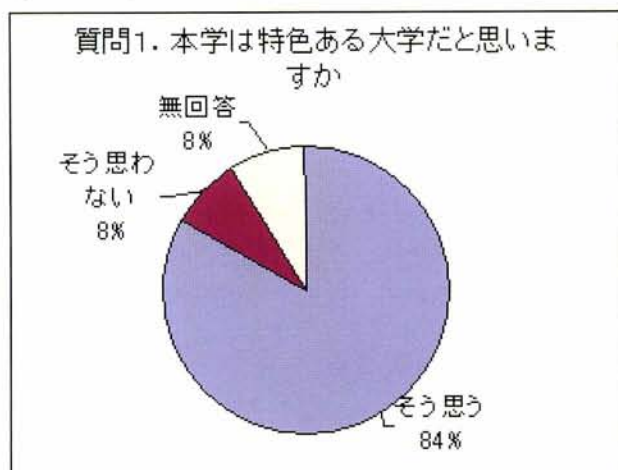
東京会場：224社

質問1. 本学は特色ある大学だと思いますか

【札幌会場】

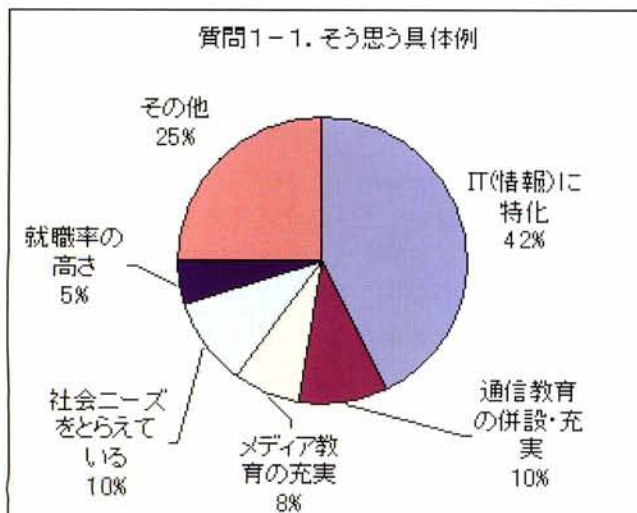


【東京会場】

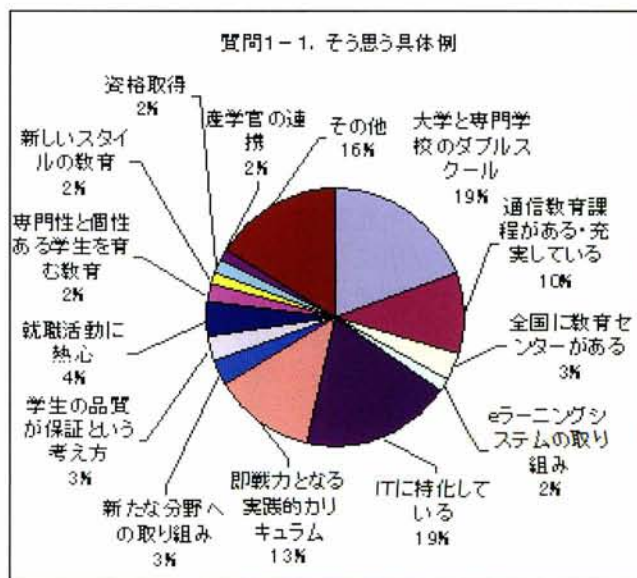


質問1-1. 質問1で「そう思う」と応えた方の具体例

【札幌会場】

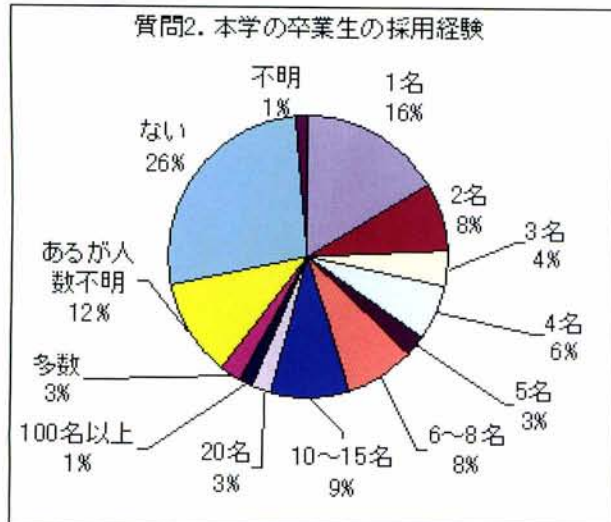


【東京会場】

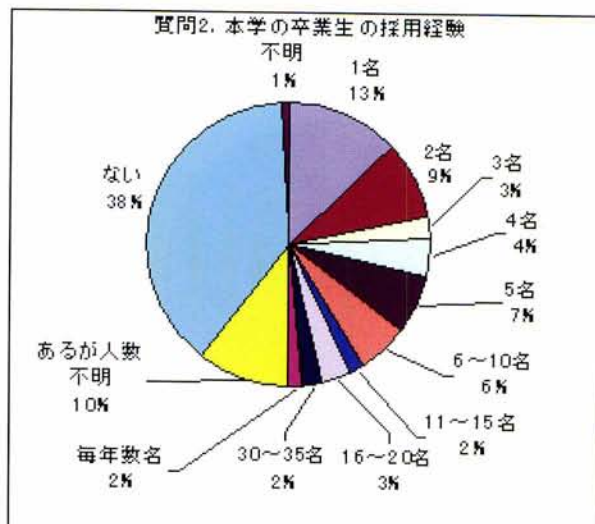


質問2. 本学卒業生の採用経験

【札幌会場】

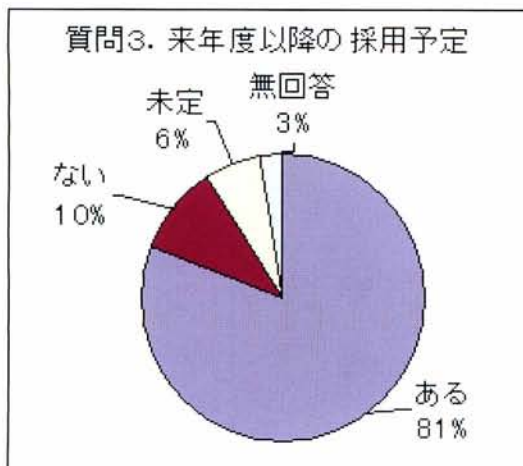


【東京会場】

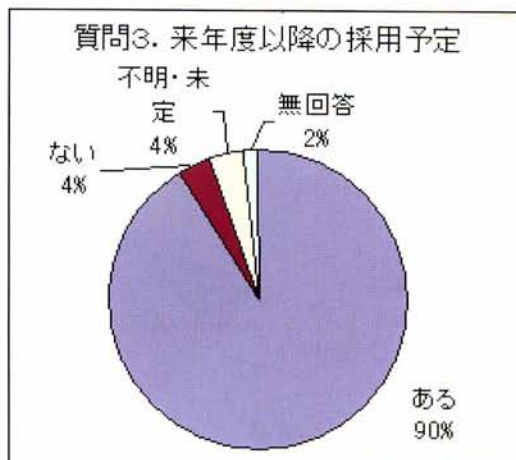


質問3. 来年度以降、本学の学生を採用する予定はございますか？

【札幌会場】

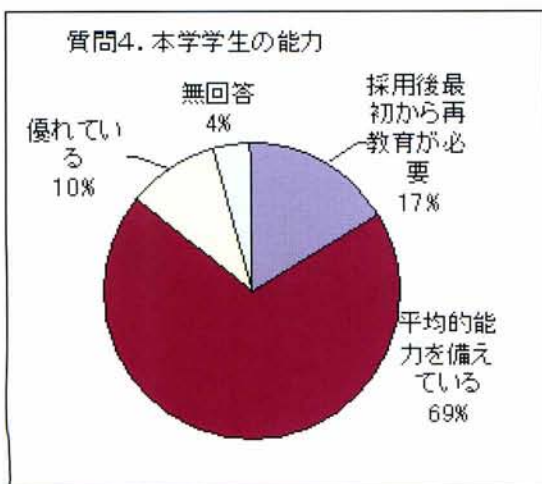


【東京会場】

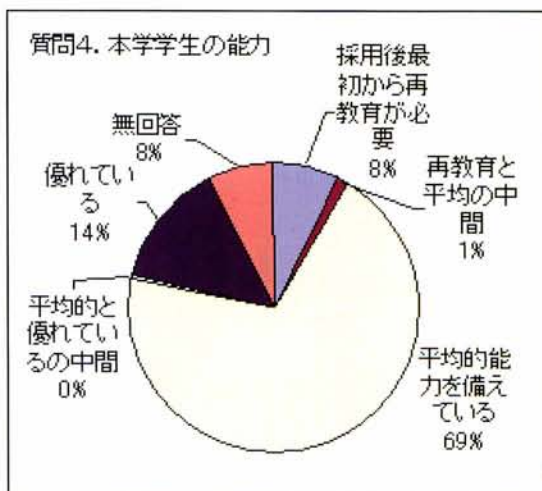


質問4. 御社の業務内容から判断して、北海道情報大学学学生の能力をどう思われますか？

【札幌会場】

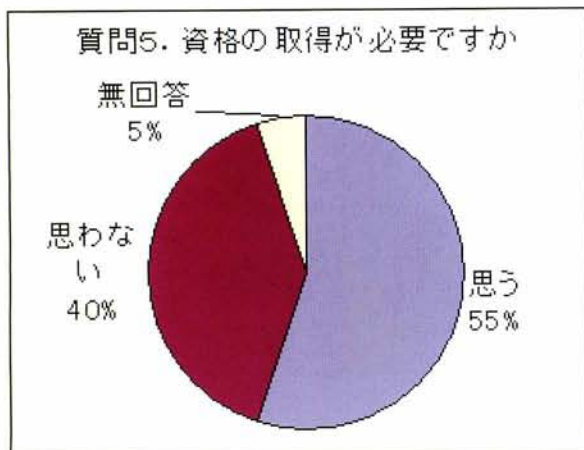


【東京会場】

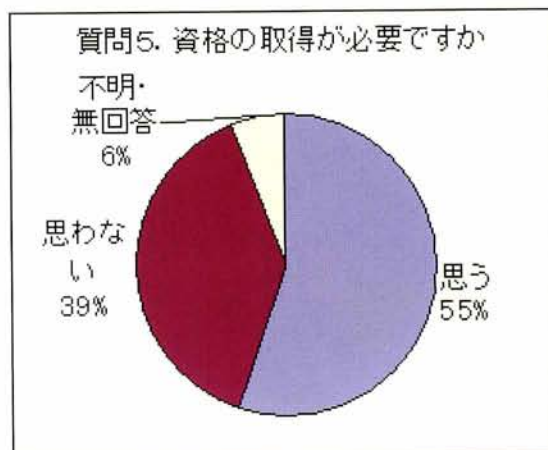


質問5. 本学学生は、御社の業務上何か資格の取得が必要だと思いますか

【札幌会場】

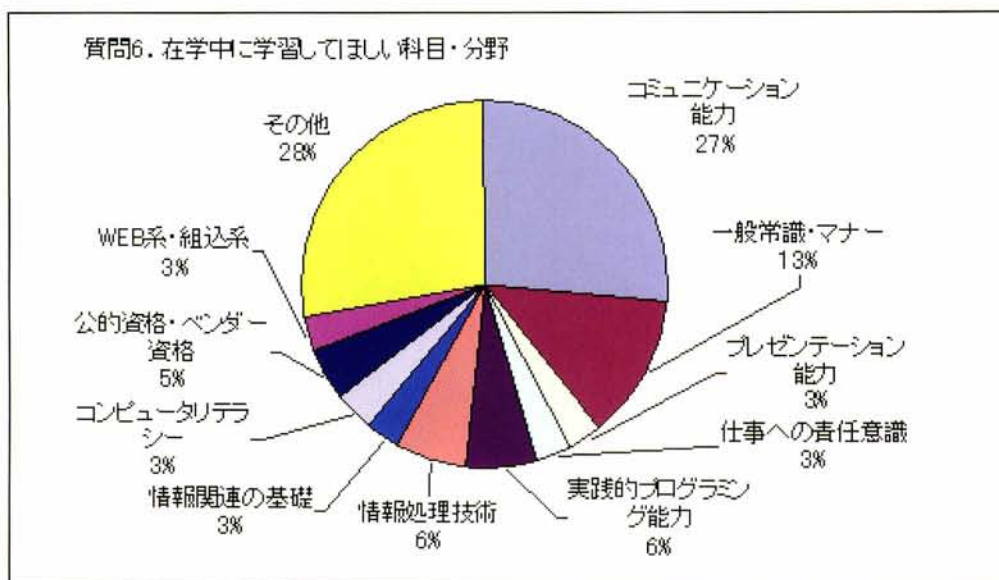


【東京会場】

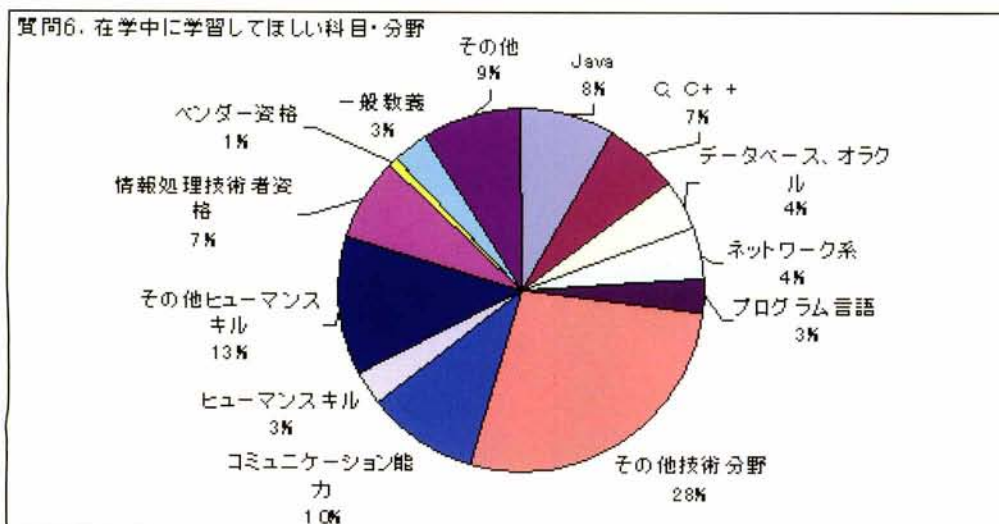


質問6. 特に大学在学中に学習しておいてほしい科目・分野があればお書き下さい (重複回答)

【札幌会場】



【東京会場】



平成17年度公開講座終了報告

平成17年度の公開講座が12月の講座をもって全て終了しました。平成16年度に初めて公開講座を1回実施し、2年目にあたる本年度は実施回数、

内容を大幅に充実しての取り組みとなりました。本年度の実施内容は次の通りです。

講座名	日程	場所	参加人数
体験！ホームビデオ編集(全6回)	平成17年 5月21日 6月11日 18日 25日 7月 2日 9日	本学教室・メディア実習室	13
ユビキタス社会とICTタグ	平成17年 6月 4日	札幌サテライト	5
文化から見た世界と日本(1)	平成17年 7月 9日	札幌サテライト	12
文化から見た世界と日本(2)	平成17年 7月10日	札幌サテライト	19
コンピュータで暑中見舞いを作ろう(全2回)	平成17年 7月30～31日	札幌サテライト	2
ゆっくりのんびりWORDに挑戦(全5回)	平成17年 8月22～26日	本学実習室	6
デジタルカメラで写真を楽しむ	平成17年10月 8日	札幌サテライト	14
プログラミング入門-JAVA-(全4回)	平成17年10月12日 15日 19日 22日	本学実習室	20
国際会計基準の日本経済への影響	平成17年12月 1日	本学松尾記念館講堂	85
コンピュータで年賀状を作ろう(全2回)	平成17年12月10～11日	札幌サテライト	17

参加者の中には、4回参加のリピーターが1名、3回参加の方が5名、2回参加の方が17名と、繰り返し参加して下さる方もいらっしゃいました。来年度は、人気の講座は拡充し、また新規に講座

も開設するなど、さらに多くの市民の皆さんに親しんでいただける内容で、公開講座を提供したいと思っています。

(総務課)



公開講座の様子



特別講演会場の様子

平成17年12月1日(木)北海道情報大学 特別講演会「国際会計基準の日本経済への影響」が開催されました。講師は、国際会計基準審議会理事の山田辰己先生です。国際会計基準審議会(本部イギリス・ロンドン)は、各国の会計基準標準化のために世界の最前線で活動している組織で、世界各国からのわずか14名の理事で構成されています。今回講演をお願いした山田先生はアジ

ハラスメント 防止のための 啓発・学習 講演会の開催

本学ハラスメント防止委員会の主催する啓発・学習講演会が、平成17年10月4日(火)に行われました。今回は、「キャンパスセクシュアルハラスメントの基本的理解 ―学生の権利を守るために 被害にあわないために―」と題して行われ、札幌学院大学社会情報学部・キャンパスセクシュアルハラスメント全国ネットワーク委員である大國充彦

先生に講師をお願いしました。

最近、セクシュアル・ハラスメントだけではなく、キャンパス・ハラスメントも新聞紙上等で話題になっています。そもそも何がハラスメントに該当するのか、教職員も常に勉強の必要があることから、啓発講演会も本学では毎年実施しています。今年も講演会は、教職員のみならず学生にも開放し



講師の二宮信一先生

平成18年1月24日(火)、本学教職員を対象に本学学生相談室主催の講演会「軽度発達障害の理解と対応―青年期を中心にして―」が開催されました。「発達障害者支援法」が平成17年4月に施行され、大学等でも適切な教育上の配慮が求められていることを背景に、本学でも支援体制を整備すべく、教職員の理解を深め、研鑽を積むための講演

ア地区担当で、ロンドンを拠点に日本をはじめとするアジア各国を飛び回っています。その先生の講演が今回本学で実現しました。

講演は、専門的ながらも学生にも理解できるよう、かみ砕いた内容で、そもそも「国際会計基準とは何か」から始まり、世界の中での日本の位置づけ、また、今後の世界動向に至るまでのボリュームある内容で、一気に引き込ま

れて聞くことができました。また、英語でコミュニケーションを取ることの重要性についても触れ、学生にも大きな刺激となったようです。

また今回は、一般市民だけではなく、他大学の研究者や学生の参加もあり、貴重な機会を提供できたという面においても特徴的な講演会となりました。

(総務課)

特別講演会 「国際会計基準の 日本経済への 影響」 開催

て実施されました。今後も、学生の人権を守り、ハラスメントをおこさないために、活動を続けていくことの重要性が認識されました。

(総務課)



ハラスメント防止啓発・学習講演会の様子

会です。

講師は北海道教育大学釧路校の二宮信一先生で、長年Y M C Aなどの現場で対応してきた二宮先生の話には具体的で、大変説得力がありました。また、実際のケースへの対応についてなど、多くの示唆に富んだ話も聞くことができました。講演会に参加した教職員は、軽度発達障害への理解を深め、それぞ

れ問題意識を新たにし、大変有意義な講演会となりました。

講演会終了後は、オルゴール療法について本学の加藤喜久子教授から説明があり、実際にオルゴールの演奏会も行われました。オルゴール療法については、これから学内で実際に活用される模様です。

(総務課)

学生相談室が 講演会開催

Arizonaで数学をしてきました



写真②セドナの丘の飛行場にて

2005年10月1日から12月29日のあいだArizona州立大学(USA)にて「増大パラメータ項を含む粘性流体方程式の解析」について研究を行いました。主な研究は気象現象の数学的な解析です。この研究はArizona州立大のAlexMahalov教授(ロシア人、写真1の右端)、BasilNicolaenko教授(フランス人)、Steklov研究所(Russia)のGregorySeregin教授(ロシア人、写真1の左端)、Darmstadt工科大学(Germany)ポスドクのJuergenSaal氏(ドイツ人、写真1の右から2番目)、慶應義塾大学COE研究員の乾勝也氏(写真1の左から2番目)および松井という構成にて共同で行われました。常に全員が参加していたわけではありませんが、活発な議論を行うことができました。また様々な国の数学者が共同で研究を行っているということは、数学が国際的な広がりで見られる分野であることを示し、私にとって励みであり喜ばしい限りです。

Arizona州立大のMahalov教授は、数学教室(理学部)と流体力学教室(工学部)の両方に席をおき気象関係の数値解析的と数学に造詣の深い方で、ともすれば数学に偏りがちな我々に良い示唆を与えてくれました。またMahalov教授・Saal氏・乾氏らとは彼らが北大に滞在中に共に共同研究をしたので、その延長として今回の共同研究も楽しく行えました。また、Seregin教授は昨年の半ばまで慶應義塾大学に1年半おられたので面識もあり、我々のチームワークは順調であったと思います。そのおかげで、我々の共同研究は実りのあるものになったと言えます。今回の成果は、論文二つにまとめ詳細な手直しの後、投稿する予定です。

Arizona州立大学について少しふれておきましょう。主なキャンパスは、州都Phoenix近くのTempeにあります。規模は非情に大きく、Tempeの一番主要な施設が大学でした。また大学には、ジャンボジェットが離発着できる飛行場やFrankLloydWright設計によるコンサートホールな

情報メディア学科 教授 松井 伸也

どもありました。このコンサートホールはイラクの革命前に当時のイラク王がWrightに設計依頼していたのですが、フセインの革命によりイラクに建築することができなくなり、かわりにこの大学に作ったものだそうです。このコンサートホールで前のアメリカ大統領選の最後の演説会があったのは、皮肉な話だと思いました。

Arizonaでの生活は、たとえば「雨は3カ月の間2日だけ」、「昼間は30度、夜は0度の日もある」など日本との気候の違いに驚き、「車のないアメリカの生活」に少々疲れ、食事の重さにも疲れするなど、生活は心地よいとは言えませんでした。しかし久しぶりに得た「数学だけに集中」できる機会には、この疲れを差し引いてもあまりあるものがありました。さらにMahalov教授ご夫妻は、我々のアメリカでの数学以外の生活に何かと変化をつけて頂きました。例えば、Saguaro(サワロ)湖では湖に面して10m以上にもなるsaguaroサボテンの林立する姿を楽しみ、FrankLloydWrightの作ったBiltmoreホテルではワインと歴史ある建築を満喫し、リゾート地のSedona(写真2、Mahalovご夫妻と筆者)への一日旅行ではTempeとは違った風景に見とれ、Tempeにある二つの地ビール店ではドイツ人のSaal氏なども共にビールを飲み、Jazzを聞きながらワインを味わい、ご夫妻の家でクリスマスディナーを楽しむなど、ご夫妻のおかげで数学以外の楽しい日々も過ごせたと思います。

最後に3カ月もの間、研究を行う機会を与えて下さった北海道情報大学の皆様と学生の方々に感謝の意を表して報告を終えます。



写真①Mahalov氏の計算機にて

ピアサポートルーム利用状況



■半年を終えて

大学院1年 阿部 涼一

まず最初に、長いようで短い半年間はとても貴重な時間になりました。

特に、質問に答えるためには当然ながら自分はそのをほぼ完璧に把握しなくてはならない。その事に改めて気づいたのは最初の相談者がピアサポートルームに来たときです。正直、かなり焦りましたが、同時にリアルな声を聞く事が出来て、本当に勉強になりました。

◆ピアサポートルームの改善点について

ピアサポートルームはまだ出来たばかりなので、これからみんなで意見を出してより学生の方が気安く相談できる空間作りをしていきたいと思えます。

そこで、私が感じた改善点としては、まずピアサポートルームは相談所というか事務所的なイメージが強い感じがしました。

観葉植物や音楽で幾分柔らかくなりましたが、全体的にまだ硬さが残ると思えます。

こういった部屋の場合、心理学やカラーコーディネートの観点から見て、より安心感を持って頂けるような部屋にした方がいいと思えます。

また、他校の相談ルームは年中いつでも開いていると聞きました、確かに学生は長期休暇でも来るわけですから、長期休暇中も誰かが待機している必要はあるかもしれないと思えます。また時間的な事を言えば、せめて5講目終了から30分はピアサポートルームが開いていた方がいいと思えます。

他にあるとすれば、外から中が見えないのも問題かもしれません。せめて半透明な曇りガラスで壁を作り、見えるようにした方がいいと思えます。これらは全て、学生の方に安心をして来て頂くために必要な事かと思えます。

■学習アドバイザーを体験して

情報学科4年 西 健太

今年度の後期から、ピアサポートルームの担当をさせて頂きました。

最初の頃は、この部屋の存在が周知されていないせいか、学生が訪れることが殆どなかったのですが、担当の方や、教職員の方のアイデアによる掲示やポスターを用いた宣伝を行うことによって、訪問する学生の数が増えてきました。また、学生にとって入りやすい環境を目指して、BGMによる音響効果・観葉植物・テーブル・椅子の設置を行いました。そうした結果、学生にも目に留まるような部屋に少しずつ変わっていったと思えます。

私が実際に受けた相談内容は、情報系の科目に関するものでした。例えば、プログラミングとは何かといった基本的な事柄や、どういうコーディングを行えば動作するかといった内容の相談が多く、それに付随した授業の課題やレポートを学生とともに考察し、解決のための手段をアドバイスしていききました。

また、卒業論文作成のために、毎回のように訪問してくれる熱心な学生もいました。私も4年次の学生なので、この手の相談に戸惑うことも多かったのですが、その学生と課題を取り組んでいく過程で、自分でも知らない部分を発見でき、それを調べていくことで勉強できたので、よい経験になったと感じています。

その他にも、勉強とアルバイトを両立させるには、どうすればよいかといったことや、病気のため休学していた学生への対処方法を担任・ゼミの先生方と相談して、アドバイスしていききました。学習アドバイザーという仕事を通じて、学生・教職員の方々と話ができるよい機会となりました。これからも、学生と教職員の方々のブリッジとなるピアサポートルームであって欲しいと願っています。

大学院産官学連携セミナーを開催

情報が創る北海道観光

—高付加価値化のビジネスモデルを考える—

平成18年1月20日(金)午後2時より、本学札幌サテライトにおいて標記セミナーを開催しました。

本セミナーは、本学の客員教授である大阪大学大学院教授金井 一頼氏を中心として企画され、大学院講義を社会に開放することをとおして、本学大学院が有するコンテンツを広く参加者に知ってもらうことを目的として実施されました。

当日は、事前申込者及び当日出席者を合わせ59名の参加者となりました。基調講演では、札幌国際観光(株)代表取締役社長の藤江 彰彦氏に「観光業界から見た可能性の大地」をテーマに約60分間、北海道観光振興の将来展望と諸政策について講演

していただきました。続いて行われたパネルディスカッションでは、金井客員教授をコーディネーターとし



て、4名のパネラー(札幌国際観光(株)代表取締役社長・藤江 彰彦氏、北海道観光のくにづくり推進室長・成田 一憲氏、インフォネット株式会社代表取締役・岩谷 公司氏、本学助教授・向原 強氏)により、約90分間、北海道という素材をどのように世の中にアピールしていくべきかフロアーをも巻き込んだ白熱したディスカッションが行われました。参加者からは「興味深い話を聞くことができた」、「一方通行のセミナーではなく参加者との対話形式であったことがよかった」などの意見があり、初めてのセミナーではあるが好感触を得ることができました。(大学院課)

Short Essay

江別の冬を楽しもう

2月11日に江別市国際交流センターで開かれたスノーフェスティバルに、私たちC.O.C.(コンピューター・オペレーティング・クラブ)の5人がボランティアで参加し、カプトムシの雪像を作らせてもらった。まずは雪かきから始め、バケツに入れた雪に水を混ぜて固めた後、形を削り出した。冬に夏

カプトムシの雪像を制作したC.O.C.サークルのメンバーたち



の虫を作ったら面白い、というアイデアだったが、仕上げまで苦戦。結局、前日8時間の作業で足りず、当日朝からもがんばってぎりぎりで完成させた。

情報大からは他にイベントサークルの6人と三浦洋先生も参加し、チューブで滑る大スロープ(高さ約4m)とかまくらを作った。当日は空も晴れて約170人のお客さんでにぎわい、センターの職員さんが驚いたほど。子どもたちはスロープ滑りで歓声をあげ、カプトムシの雪像にのぼったり、写真を撮ったりと好反応。作った側としてはとても嬉しく思った。今度作る機会があれば、より大きな雪像を作りたい。

東山 勇人(情報メディア学科2年)

今年5回目をむかえる「北海道情報大学Webデザインコンテスト」。学習活動の一環として、Webページ(ホームページ)を制作する過程でコンピュータ技術とコンテンツ制作能力や表現力を磨くとともに、自主的な創作活動を体験する目的で行われるものです。応募資格は、通学部生・通信教育部生・大学院生・研究生となっていて、作品はテーマ部門(今年のテーマは「未来」)、フリー部門(自由なテーマで作成)、ビギナー部門(初心者対象)の3部門で争われました。本年度は9月22日に応募が締め切られ、受賞作品が次の通り決まりました。

◆総合優秀賞/Present the future

袖村昌司、坂本なつき(通学課程)

◆テーマ部門・優秀賞/地球温暖化～いつかくる未来～

山中大樹(通学課程)

◆フリー部門・優秀賞/Webページ制作入門

芦原建(通学課程)

◆ビギナー部門・優秀賞/パズル

松村臣剛(通学課程)

◆各賞

・技術賞/Webアプリケーション

阿部真之、白石妙子(通学課程)

・ウェブデザイン賞/風林火山

本間雅章(通学課程)

・ウェブデザイン賞/未来のフィルム

五十嵐孝幸(通学課程)

・努力賞/公園道 ~Route de parc~

佐原広大、後藤翼(通学課程)

・ウェブサウンド賞/Planet Melodies



今年2回目となる「ビジネスプレゼンテーションコンテスト」。このコンテストは、ビジネスアイデアの内容だけでなく、プレゼンテーションの出来映えも審査の対象となります。本年度は、ビジネスプラン部門とビジネスアイデア部門にそれぞれ5点の応募があり、平成17年12月26日(月)、プレゼンテーションが実施されました。実際に人前で言うプレゼンテーションの難しさ、パワーポイントでの資料作成技術へのコメントなど、応募した学生にはとても良い経験だったようです。

審査の結果、各賞が次の通り決まりました。

【ビジネスプラン部門】

◆最優秀賞

「団塊世代向けフリーペーパー事業」

経営情報学専攻科1年 村岡元気、小岩輝芳、新保智之

鳥浜健(通学課程)

◆ビギナー部門・努力賞

・「旅行」に行こうよ。

藤原有仁(通学課程)

・コンピュータアニメーションを学ぶ

浪岡亮介(通学課程)

・DO YOU LOVE JAMAICA?

荒川純一(通学課程)

・マウスの動きに対して視覚的な反応をするものを作ろうとした試作のページです。

佐藤博紀(通学課程)

・四字熟語

川股超裕(通学課程)

・我が家の車

安田一大(通学課程)

・善光寺

小熊奈都季(通学課程)

・星のしずく

石田一馬、大沼慎(通信教育課程、新潟教育センター)

・のまのま イエイ! イエイ!!

森若菜(通学課程)

表彰式は平成18年10月27日(木)に行われました。各賞の受賞者のみなさん、おめでとうございます。

さて、来年度のテーマがすでに発表されています。来年度のテーマは「仕事」。また来年多くの学生の皆さんの応募をお待ちしています。



◆優秀賞

「イノベーションのためのマーケット・プレイス」

経営ネットワーク学科2年 竹元祥

◆奨励賞

「株式会社セカンド・ライフ」

経営学科4年 三浦加苗

【ビジネスアイデア部門】

◆アイデア賞 「海外での和風喫茶」

経営ネットワーク学科3年 高橋実

◆アイデア奨励賞 「新鮮市場」

経営ネットワーク学科2年 千葉祐明

結果の発表を受けて、平成18年1月31日(火)、学長室で表彰式が行われました。受賞した学生達はすでに来年度に向けて構想を練りはじめたようです。

江別市プロモーションコンテンツを作成

このたび、江別市プロモーションコンテンツ(DVD)を本学の上原ゼミの学生が作成しました。野幌原始林を擁する江別市には、野生のふくろうが生息しています。今回のプロモーションコンテンツは、この原始林のふくろうが、江別市の営みを見守っているというコンセプトで作成されました。

タイトルは「自然とともに暮らすまち江別 ～

レンガと小麦を見守るふくろう～」で、江別市の自然と特産品である小麦やレンガを中心に紹介しています。江別市の特産品である小麦のハルユタカは専門家の間では全国的にも知られた質の良い小麦ですが、これまで収量が少なく、一般に流通することはほとんどありませんでした。しかし、数年前に、雪が降る前に種をまく「初冬蒔き」の技術が開発され、収量も伸び、最近ではラーメン等の原材料に使われています。またレンガは一市町村としては全国で一番の生産量を誇り、最近では魚礁用の管や、ガーデニング用としての商品開発も進んでいます。

コンテンツ作成

にあたっては、本学の学生が撮影、編集、作曲等全ての作業を行いました。撮影は夏に始まりました。撮影では江別市の協力のもと、通常は入ることのできないレンガ工場の内部にまでカメラを入れることができ、貴重な映像を撮ることもできました。その後、音楽を入れ、編集し、1月に江別市に納品しました。

コンテンツは、江別市が行っている異業種交流会である江別経済ネットワークで一般にお披露目が行われ、評判は上々でした。また官学連携としても注目を集め、今後の更なる連携の拡大に期待が持たれます。

◇ ◇ ◇

また、今回作成したプロモーションコンテンツのダイジェスト版を、東京中野にある電子開発学園本部前のパインビジョンでも放映しています。ダイジェスト版は、小麦バージョンとレンガバージョンの2本。JR中野駅の中央線のホームからちょうど見える位置にあり、東京での「江別市」の知名度アップに一役買っています。

(企画調査室)



中央線のホームに入ってくる電車とパインビジョン(上)、及びその映像



コンテンツ映像から。上から「江別を見守るふくろう」「土に帰る環境に優しい素材『レンガ』」「小麦ハルユタカの畑」

新さっぽろ冬まつりに参加しました

平成18年2月3日(金)～5日(日)に行われた“新さっぽろ冬まつり”(札幌市厚別区・株式会社札幌副都心開発公社主催)に、今年、本学は上原ゼミと高井ゼミのコラボレーション作品で参加しました。

このイベントのメイン会場である「ふれあい広場あつぱつ」(屋外)には、縦3m×横4mの雪のスクリーンが設置され、ミニシアターと名付けられました。本学はイベントのひとつの役割を担い地域貢献を行う一環として、また市民の皆さんに本学学生の作品を見ていただくいい機会として、

作品を提供しました。今回の作品は、これまで上原ゼミの学生がとりためてきた映像作品に、高井ゼミの学生がオープニングタイトルに加えて、作品と作品のつながりを3次元CGで作成し、それらを1本につなげたものです。これまで賞を取ってきた上原ゼミの映像作品はもちろんのこと、作



進行を行う本学の学生とミニシアターに映し出されたCG雪だるま

品をつなぐ高井ゼミの学生の3次元CGの出来映えもすばらしいものでした。

初日の3日(金)は作品の解説なしで、18:00～18:30の上映でした。2日目の4日(土)は学生による作品解説付きで18:15～17:00、最終日の5日(日)も同様の解説付きで17:30～18:15の上映となり

ました。当日は雪の降りしきる、とても寒い中、学生が進行から機材の操作まで全て行いました。

会場の中には他に、頭でっかちの雪だるまが横になった姿で、中がイグルーになっていたり、横から滑り台になっていたりする「おやすみ雪だるま」が大小数基作られていて、昼間は子供達の歓声が絶えませんでした。また甘酒やおでんなどを出すコーナーもあり、夜にはアイスキャンドルで会場は幻想的に彩られ、切れることなくにぎわいをみせていました。(企画調査室)



総合司会から進行を引き継ぐ本学学生

『第13回星の降る里芦別映画学校』星の降る里芦別賞受賞
『第11回北海道映像コンクール』学生部門賞受賞

『森のふくろう』～エゾフクロウの子育て日記

情報メディア学部 3年・上原ゼミ 中村 由美

門賞です。これは、主にプロを対象とした映像コンクールで、デイリーニュース部門、企画ニュース部門、長編部門、奨励賞部門、学生部門に分かれています。

応募作品は、プロの厳しい視点で審査され、札幌市のスピカで授賞式が行われました。この式には、私と、編集を担当した岡君、音楽を担当した谷口君の3人が参加しました。2人ともちょうどその日に就職用写真撮影があったらしく、スーツのまま来ていて、プロの方々ととても馴染んでいました。岡君がみなさんの前で、「ついでに、この場で就職活動をしたいと思います」と言ったら、周りからドッと笑いがこぼれ、拍手がわき、一瞬にして場が和みました。

式の後には、参加者でビンゴ大会を行い、私はラーメンセットを当てました。最初は緊張していたものの、現役のプロの方々のお話を伺うことができ、とても貴重な経験をし、参考になりました。

この『森のふくろう』は、エゾフクロウの親とヒナの生態系をテーマとした作品です。この作品には、私たちの身近にある森にもたくさんの命が誕生しドラマが生まれていること、そして、生命を育む森を大切にしていこうという思いがこめられています。

撮影には約1年かかり、録画テープはのべ60本以上になります。編集は夏休みを返上して行い、1カ月程かかりました。ヒナが誕生するまで、車持ちのゼミ生が交代で朝方見張りに行き、ヒナが誕生すると同時にみんなで撮影に行きました。

生まれたばかりのヒナの顔はとてもヘンテコリンで眠たそうな表情でした。そして辺りも暗くなり、もう帰ろうとしたときに、親フクロウがヒナにエサを与えている様子に巡り合えました。とても運がよく、感激でし



昨年、私たちは『森のふくろう』という作品を完成し、2つの賞を受賞することができました。

一つは、「星の降る里芦別映画学校」星の降る

里芦別賞です。このコンクールは、大林宣彦映画監督が校長を務め、ふるさとをテーマに3分間のビデオ作品が募集され、プロ・アマ問わず、全国から作品が寄せられてきます。

審査会では、大林監督をはじめ、審査委員長として漫画家の蛭子能取さんなど6

名が集まり、参加した観客の前で作品上映、インタビュー、公開審査が行われました。私は公開審査のとき、とても緊張してカチカチになっていましたが、大林監督がとても穏やかで優しい口調だったので、なんとか安心して答えられました。しかし、蛭子さんから質問されたときには、逆に笑いを堪えるのに必死でした。テレビのまんまの蛭子さんに、不思議でおもしろい気持ちになりました。

交流会では、他の応募者と話す機会があり、中には80歳くらいのおばあさんも参加していて、私たちも負けてられないという熱い気持ちがわいてきました。

もう一つは、「北海道映像コンクール」学生部

芦別映画学校での授賞式から



あいさつする大林監督



左:「芦別映画コンクール」、「北海道映像コンクール」
受賞記念で井野学長より贈られた学長表彰の盾
右:「第11回北海道映像コンクール」学生部門賞



た。ゼミ生の中でも、中野君、柴田君がその様子を正面から撮ることができ、プロに負けないくらいの貴重な映像を撮ることができました。

今まで、テレビや本などでしか見ることがなかったフクロウを間近で感じ、人間のような表情とおもしろい動きを発見することができ、とても勉強になりました。そして、ゼミ生みんなで一つの作品を完成させたことなどはとてもいい思い出になりました。

それではみなさんにゼミ活動について語ってもらいましょう。



北海道映像コンクールの授賞式

アオ:「まだ薄暗い朝の森の中に入って行って、森の道を散歩している人たちと挨拶を交

わすのが凄く新鮮で気持ちよかったです！それと、一人で森の奥まで入りすぎて、蜂に追っかけられました。」

イトウ:「ゼミの一年間のおもひでポロポロは、ひたすら勉強でした。カメラや編集など課題がたくさん見える1年だったと思います。」

ハシモト:「フクロウの撮影は、朝早くからの撮影に多少の大変さがありましたが、普段見ることのできないふくろうを見つけたときの嬉しさがありました。そのフクロウの作品が受賞してとても嬉しく、良い経験になったと思います。」

クマキ:「なかなか姿を見せてくれないフクロウの映像をカメラで撮ることが出来たときには、すごく嬉しく貴重な体験ができたことが思い出として残っています。」

シバタ:「ゼミに入るまで知っているようで知らなかったカメラの使い方や編集技術について1から学べることは無駄ではなかった。これからは就職した上でも役立つようにしたい。」

ナカノ:「私が撮った、親フクロウがヒナに餌を与えているシーンを使われたことがとても嬉しかったです。人が集まっていないところで撮影したことがポイントでした。ただ、私も驚いてカメラをまわしたので多少ピントが合っていなかったことが残念です。」

アキヨシ:「交流パーティで、蛭子さんばかり見ていました。隣で伊藤君が写メで撮っていてとてもおもしろかったです。大林監督や蛭子さんに会える機会なんてめったにないので学生時代の貴重な経験になりました。」

ナカムラ:「交流パーティで、真面目に来客の話を聞いていたら、会費分の2千円も食事を食べられなかったことが残念でなりません。」

オカ:「フクロウを撮って、編集して、受賞して、蛭子さんに会って、テレビにも出られたので思い残すことはありません。」

タニグチ:「私はこの作品でBGM作曲の役割を与えられました。以前からパソコンとシンセサイザーを使った作曲が趣味でしたが、今回のように映像に音楽をつけるのは初めてでした。そのため最初はこの映像作品と自分の音楽がちゃんと合うのだろうかと不安でした。しかしフクロウがとてもかわいらしく、躍動感あふれる表情を見せてくれて、そのおかげで直感的にかわいらしいフクロウと自然に合ったメロディを思いつくことができました。」



北海道映像コンクール祝賀会で

「伝えることの楽しさ」と「伝わることの嬉しさ」

—中国語研修に参加して—

システム情報学科 3年 小泉 有希

私が今回の語学研修で学んで、感じたことは、この二つのテーマです。多少拙くても、相手に伝えたい意思と相手が理解してくれようという意思が双方にあるのなら、そのシチュエーションも手伝って（ハンバーガーショップに行き、本を売って下さいとは言いませんし）、コミュニケーションはとれるということを感じました。自分の中国語のレベルが低いのは、百も承知、通じるのかという怖さと、それはそれで仕方ないという諦めにも似た、けれど勢いのあるいわば体当たりのコミュニケーションを、現地で実際に行なってきました。口語で通じないのなら、筆談で、筆談で駄目なら、中国語より拙い英語で、英語で駄目なら、ジェスチャーで、おまけに笑顔をつければ、大体はなんとかなりました。

南京大学での授業は、ひたすら一年の時に中国語の授業で習ったことの復習でしたが、私たちに中国語を教えてくださいました司先生と趙先生は、とても根気良く、私たち生徒を指導してくれました、しかし、会話は全て中国語、発音の練習をしているときはまだいいのですが、初めは「～ページを開いて」ですら理解できず、一体自分は何を勉強してきたのだろうと本気で悩みました、しかし、

そう思った時点で全て諦め、それはそれとして、今学べることを学び取ろうと決心しました。

授業が三分の二も過ぎようという頃には、授業内容以外の会話も出来るようになっていき、それまでは日本人の外国人コンプレックスなのか、はたまた閉鎖的な島国気質なのかは分からないけれども、先生とのコミュニケーションを怖がっていたように思えます、それでも、万国共通の天気の話から、昨日食べたもの、恋人の話まで、積極的に話しかけることによって、私たちの言語能力も遅々としてながらも、確実に上達していきました。

正直、ただでさえ日本の歴史に明るくない私が中国の歴史に明るいはずもなく、名所旧跡や歴史に名を残した人物の庭園などに行っても、いまひとつ感慨がわかなかったものの、どこことなく親近感のある中国の建築様式や調度品などの彫刻は恐ろしく精密で、とても感動し、その素晴らしさには圧倒され続けました。もし機会があれば、歴史を勉強してから、もう一度同じ場所を巡り、一度目とはまた違った感動を味わえたらと思います。

最後に今回の語学研修に携わり、惜しみない協力をしてくださった玉置先生はじめ、南京大学の方々、もちろんこの企画をたて、私達に貴重な経験と機会を与えてくださった情報大学の関係者の方々に心から感謝致します。中国は、私に日本にいただけでは分からなかった様々なことを教えてくださいました。そして、色々な意味で私を遅くしてくれました、今回得たものは、これからの人生で、きつといきけると信じています。



左が筆者。
北京郊外の万里の長城で。

経営情報学部情報学科 平成12年3月卒 廣奥ゼミ



阿蛭 栄一

私が就職活動時に重要視したのは「プログラミングのない仕事」という点でした。自分はプログラミングが苦手だと勝手に思い込んでいたのです。所属した廣奥ゼミにプログラミングが得意な学生が多かった影響かもしれません。そして念願のプログラミングが無いはずの企業に就職し、6年後の今も同じ職場でOracleという製品のサポートをしています。

サポートならばプログラミングの知識は不要と考えて選択した職種でしたが、これは間違いでした。OracleにもJDeveloperというJ2EEの開発ツールがありますし、JDBCなどのミドルウェアのサポートではプログラミングの知識が必須です。更に職場では当初「情報大ならJavaぐらいできるのでは？」という期待もあり、現実とのギャップに苦戦しました。しかし諸先輩の親切な指導で、現在ではお客様とコーディングについて協議できるようになりました。ちなみに同期入社で情報系出身は自分だけです。最近は情報系出身の新人も増えていますが、大半は他分野からソフトウェア業界に入ってきます。それでも数年後には必要なスキルを身につけています。これはソフトウェア業界自体に強力な教育機能が内在する証拠だと私は考えています。つまり学生時代にプログラミングができなくても就職後の努力次第でスキルを伸ばす事が充分可能な業界なのです。

学生時代だけが勉強の期間ではありません。日進月歩のソフトウェア業界では毎日勉強です。ですから就職活動の段階では自分のスキルにこだわらず「何ができるか？」よりも「何をやりたいか？」という常に挑戦する姿勢で取り組んでみてください。あなたの新しい可能性が見つかるかもしれません。

経営情報学部経営学科 平成17年3月卒 坂本ゼミ



袴田 志織

「当たり前」の大切さ

蒼天祭実行委員会。私は、大学の4年間でこれに捧げました。

そこで出会ったみんなは、私にとって、とても大切な仲間です。

講義の合間や放課後、休みの日など、誰が声をかけたわけでもないのに、みんな実行委員会室に集まってきました。そして蒼天祭の準備をしつつもくだらないことばかり話して、つまらないことに爆笑して、どうでもいいことに必死になって、バカなことに命をかけて、そうやっていつも一緒に笑っていました。そしてそれが私たちにとっての「当たり前」でした。

今、その仲間たちが何をしているのかと言えば、ケーブルテレビ、パチンコ、SE、医療事務、メディアデザイナー、カラオケ、公務員を目指す者、酪農に携わる者、大学院生、2人目の子どもを妊娠中のママ、あと…ニートもいます。そして私は販売員。それぞれにそれぞれの人生を歩いています。

卒業後も、札幌に留まっている仲間とは何かとよく集まっては飲みに出かけます。社会に出て1年。顔つきも雰囲気もだいぶ社会人になってきたかんじがします。でもそこでの話の内容も、くだらなくて、どうでもいいことばかり。学生時代と何も変わらない関係が、とても居心地のいいところです。そしてそれが私たちにとっての「当たり前」であることも、変わっていません。

長い人生の中で、大学はたったの4年間しかありません。でもだからこそ、その貴重な時間をともに過ごした仲間は、きっとかけがえのない存在なはずです。みなさんも是非、4年間でたくさん大切な仲間を作ってください。そしてその大切な仲間と、楽しい大学生活を送ってください。毎日を「当たり前」に過ごしてください。私たちみたいに。

学生サポートセンターより

■平成17年度 北海道情報大学説明会

平成18年1月19日（木）京王プラザホテル札幌で、平成18年2月20日（月）東京中野サンプラザで北海道情報大学説明会を実施いたしました。

この説明会の目的は、例年学生を採用していただいている企業に対し、本学の教育内容の説明と、学生の研究発表を通して、本学が目指す方向を理解していただくことです。

札幌会場では、井野学長から少子化を含めた日本の大学全体の動き、北海道情報大学の17年の歴史などについて説明があり、続いて嘉数副学長から今後の人材教育の視点について説明をいたしました。

引き続き、学生の研究発表として経営ネットワーク学科2年竹元祥君からビジネス・プラン「イノベーションのためのマーケット・プレイス」、情報学科4年松井啓吾君から3次元グラフィックス「SHADEによるアクロバット飛行の再現」、情報メディア学科3年中村由美さんからビデオ映像「森のふくろう」を発表いたしました。その後、休憩を挟み、江別商工会議所会頭安孫子建雄氏から「北海道について思うこと」と題して特別講演を行っていただきました。

東京会場では松尾理事長の挨拶に始まり、札幌会場同様に井野学長、嘉数副学長からの本学教育内容の説明、学生の研究発表を行った後、情報学科4年名越康人君と通信教育部大阪教育センター4年山口好広君から卒業生代表の挨拶を行いました。特別講演は総務省情報通信政策局技術政策課研究推進室長竹内芳明氏から「e-Japanからu-Japanへ」



についてお話をいただきました。

札幌会場に参加された企業数は87社、参加者は116名。東京会場に参加された企業数は226社、参加者は301名でした。参加された方からは研究教育内容がよく理解できたと好評でした。

安孫子会頭特別講演

あいさつする井野学長



嘉数副学長が説明



中村さんの研究発表

学生サポートセンターより

■平成17年度卒業生の就職活動を振り返って

日本経済は回復の兆しが見えるものの、北海道における就職環境は流通業を中心に明るい兆しがあるとはいえ、依然として厳しい状況が続いております。実際に本学に来る求人社数は約1,600社と前年度よりも約25%増えています。北海道内に勤務の可能性がある求人社数は約340社と前年度と比較して10%増に留まっています。そのような状況下において、平成17年度も96.2%と道内でもトップクラスの非常に高い内定率を得ることができたのは、教職員が一丸となって指導してきたことはもちろん、何と云っても学生の皆さんが努力した賜であると評価しています。特にIT業界を目指す学生の皆さんが、道外へも目を向け積極的に活動を行った結果と言えるでしょう。

4年生の皆さんは、企業が採用数を増やし報道等では売り手市場と言われていますが、採用基準を下げる企業は少なく厳しい就職活動が続くと思います。昨今、企業における求人数とはあくまでも予定であって、求人数に達しなくても構わないという考えですので、今一度気持ちを引き締めて臨んでもらいたいと思います。特にインターネットによる就職活動がすっかり定着していますが、自分の足を使って活動しなければ内定は得ることはできません。この利益社会の中で、自分の足で稼ぎ、自分自身が企業にどのようなメリットを与えることができるかを考え、それを自分の言葉でアピールできるようになることを心掛けましょう。3年生は近年採用活動が早期化し、3年生のうち

に内定を獲得する学生が増える傾向にあります。このような状況を踏まえ、就職活動において最低限必要な知識等を習得するための支援活動としてキャリアサポートを行っています。年間約20回のガイダンスやSPI等の各種試験対策を行いますので、休むことなく参加してスムーズに就職活動に入れるよう準備をしておいてください。

新入生、2年生は就職活動はまだ先のことと考えず、少しでも早い時期から将来の目標を定め、その目標を達成するためにはどのような能力を身につけるべきか考えることが肝要です。現在、企業はより優秀な人材を確保し、経営体質を強化しようとして努力しています。企業は学歴や出身大学を選考の基準とすることは少なく、個人の能力で評価しています。その能力とは、情報処理能力ばかりではなく、コミュニケーション能力や論理的思考力等、一朝一夕で身に付くものではありません。学生生活や家庭生活において、時間をかけて身につける必要があります。

本学では、学生生活や就職等の相談窓口として学生サポートセンターがあります。何か困ったこと、分からないことがありましたら何でも構いませんので、いつでも相談に来てください。また、学生サポートセンターでは卒業後でも就職等に関する助力ができるよう支援を行っていきたいと思いますので、卒業生もいつでも気軽に来校してください。

学生サポートセンター事務室係長
瀧澤 浩基

区分	経営学科	情報学科	情報メディア学科	全体
在籍者数	80	113	187	380
卒業予定者数	71	95	163	329
就職希望者数	57	82	126	265
内定者数	54	76	125	255
内定率	94.7%	92.7%	99.2%	96.2%

ボランティアを通じた様々な出会い

情報メディア学部・学科 倉持 太和

私が今回体験したボランティア活動は、主に『日独平和フォーラム北海道』というものです。日独平和フォーラム北海道は、日本での兵役代替のボランティア活動を希望しているドイツの青年を受け入れるために、2004年設立された市民団体の様です。ドイツでは徴兵制度があります。しかし、自己の宗教や思想的信条に合致しない場合、1年間ボランティア活動で代替できる良心的兵役拒否が認められています。前年度は2名の方が1年間のボランティア活動を終えて帰国されて、今年度は、新たに3名の方が来日されました。

そもそも、私がこのボランティアに参加したきっかけは、昨年12月のことです。私と友人の川口隼人君(同学科)、そして、私の高校時代からの友人である柏木光史君(浅井短大)の三人で互いの大学見学めぐり、カラオケ、ライブ鑑賞等して、帰り際に大通りで毎年行われているホワイトイルミネーションを見て楽しんでたときでした。たまたまそこでは、札幌の姉妹都市であるドイツ南部にあるミュンヘン、その町の伝統に似立てた『ミュンヘンのクリスマス市』というお祭りが一緒に11月下旬から12月上旬まで開催されておりました。私と川口君は一年生の時の第二外国語と二年生の教養ゼミではドイツ語を選択しており、少し興味がありましたので、少々覗いてみることにしました。そして私たち3人は、そのお祭りの中には普段見慣れないものに興味津々でした。その時にとある店に立ち寄りしました。そこにはプレゼント用のドイツ語入りのキーホルダのような物が並んでいました。私と川口君でドイツ語担当の梅津先生にプレゼントをすることに決めました。その店の店員さん(日独平和フォーラム北海道のビアンカ・フルストさん)に依頼して、オリジナルを作成してもらうように頼みました。そのとき、私は外国の方だから日本語で依頼しても最初は通じるか心配でした。けれども彼女があまりにも日本語が上手でしたので私はかなり驚きました。しかも、本場のドイツ語も聞けてすごい感動もあり楽しかったです。私はその時ドイツにも行ってみたいと思いました。その理由として、昨年、私は一度海外事情でカリフォルニアでの1ヶ月の経験あり、外国語で触れ合う楽しみを初めてそこで学びました。ですから、まるでまた海外にいるような気分にもなりました。しばらくして依頼品が完成し「Danke schön!」とお礼の挨拶を交わして、私たちがもう帰ろうとしました。そのとき、ビアンカさんの店の隣窓から、日本人の中年のおばさんや私たちと年がそんなに変わらない女性社会人の方が、この祭りで使われていたお客さんの使っていたコップと皿を洗っているようでした。なぜ皿洗いをしているのか不思議に思いましたが、窓ガラスに貼られた一枚の紙をよく見ると、皿洗いのボランティアの募集がかけられていました。始め自分は、彼女たちの行為は互いの国同士の友好を深める行為であると、感心していました。すると、そこの窓が開きボランティアの誘いが友人の柏木君に来て、彼はすんな

りといつの間にか引き受けており、そして私と川口君も引き受けることになりました。それがボランティアをするきっかけであります。

実は先ほど話をしましたビアンカさんは、この皿洗いのボランティアの主任さんでもありました。私たちは1時間ほどそこで皿洗い役として働きました。この祭りの終了時刻の、夜9時過ぎまでかかりました。ここにいたみなさんの話を聞くと、私たちが訪れる前からこのボランティアを知り合いの方に勧誘されたようで、また他にもたくさんの方が新聞や広告を通して来られ、ローテーションを組んで、皿洗いをされていたようでした。たまたま通りがかりの私たちのボランティア応募は初めてのようで大変感謝されました。それから、この時間に皿洗いをされていた先ほどの女性は、柏木君の浅井大学の先輩にあたり、あまりの偶然に、私たちは話が合いすぐにこの場にとけ込めました。ちょうどこの時に、この祭りの実行委員長さんが駆けつけて、ボランティアの方々にお礼の挨拶に来られ、私たちの今回の参加に対して敬意を払ってくれました。私たちもそれに対して、みなさんに今回参加できたことのお礼を言いました。すると、ビアンカさん達に次回の誘いを受け、引き受けることにしました。お祭りの閉会まで残り4日間ほどですが、私と川口君と柏木君で、互いの予定が空いている日にお手伝いすることにし、私は2日目と3日目にしました。

私は予定があり1日目と4日目は友人二人にお任せしました。その話を聞くとまた、いろんな方が訪れたようです。私が出席した2日目は、偶然に学校の授業を終えてから大学の仲間と先生方と川口君の勤め先で、忘年会がありましたので、私と柏木君の二人で忘年会の時間まで皿洗いをすることにしました。この日は、主に北海学園大と北星大の二人と知り合い、二人とも英文科の方で結構外国に興味がある様でした。3日目には、川口君と一緒に皿洗いの手伝いをしました。この日は、今後私たちがこの日独フォーラムのボランティアをする上での仕事を紹介していただける、キーマンの小林久公さんというこの事務局長さんと知り合うことができました。その方から、祭りの終了後、後かたづけのボランティアと、打ち上げに招待されました。この祭りを無事終了することができ打ち上げの日を向かえました。

この日は、私と川口君で昼から後かたづけをしました。いつものボランティア会場は解体のため、打ち上げが行われる場所に移動することになりました。打ち上げがついに始まり、私たちが知り合った人や、このお祭りに参加された人々にも出会いました。その中には、私たちと同じ学生や社会人まで幅広い職種の方々がありました。また偶然なことが二つありました。一つは、川口君の高校の先輩と知り合い、大変親切にしてもらいました。二つ目は、前回に出会ったビアンカと小林さんと、色々話をし、名刺交換とアドレス交換しまして、今後のボランティアについて個人的に紹介してもらえるようになりまし

日独平和フォーラム
北海道のメンバーと
右から3人目、かが
んでいるのが筆者



た。この二人の方とは偶然にも住まいが、私の家の近くで、地域の話で盛り上がりました。故に、私は他にも色々出会いがありましたが、この二人の方が印象に残りました。

次に、打ち上げ終了時に小林さんから2週間後のクリスマスパーティを招待されました。この日、私は一人参加でしたが日独平和フォーラム以外のボランティア団体も来ていました。また、他の参加者と知り合いよかったです。

年が明け、新年の挨拶と昨年のボランティアに対して、お礼のメールが小林さんから来ました。内容の中には、1月の末に昨年ドイツから来た3人の中の一人にあたる、『ヤン・オッコさん』が働いている、あいの里サポートセンターとアクティビティセンターの、ニューイヤーパーティが開催され、ボランティアの依頼があり、私と川口君は参加することにしました。一般のパーティなので、学校の梅津先生に参加をお願いしました。

ニューイヤーパーティはあいの里で開催され、私と川口君はコーヒーの販売員として働くことになりました。この日、様々な方が来られ、学生では、教育大女子学生、光塩短大生が10名程教育実習のため、ボランティアをしていました。他にも、パーティの設営サポートとしてかなりの方が来ていました。私の店の周りにいる方で、私たちが働いた褒美にビールなど差し入れしてくれ、親切で感じのよい人達でした。また、このパーティの意義は、肢体不自由・視覚障害の方々为主体となり、社会に対し、主張や今後の願いを訴えていました。また子供達も会場に参加し、自分たちが自立して生きていこうと努力していました。そして、私たちと一緒に店の手伝いや、劇などをして一般の方に感動あたえていました。

ドイツから来たヤン・オッコさんはそういう方々のサポートし、福祉活動をされている姿は、本当に素晴らしい事だと私は感心しました。パーティが無事終了し、ボランティアをした方達と集まり、この日の活動反省と祝杯をあげました。私と川口君は、ヤンさんと偶然に知り合うことができました。ヤンさんは、昔から日本に興味を持ち、日本語も結構話せる方でした。彼は私たちと同年齢でした。私たちがドイツ語を学んでいることを告げ、彼の日本に対する一面も知ることができ、日本語とドイツ語を交えて、時には公用語の英語を使って話し合い、自分も良い勉強になりよかったです。ヤンさんと話しているとき、いろんな方がヤンさんと会話してみたいと、その場に入ってきました。中でも、世界各国を渡り歩いて、多くの国の言葉を知っている、バイリンガルな日本人に、私と川口君は驚かされた。世の中にはいろんな方がいるのだと知った一日でした。

次の活動は最近のことで、2月の半ば過ぎに行われ、ボランティアではなく、ピアンカさんとドイツから来た3人のヤンさん、イェンツさん、クリストフさんの4人を主としたスピーチと、ドイツについての歴史や現状を学ぶゼミの場でした。その歴史について簡単にアシスタントしてくれたのが小林さんでした。ナチスが行ったこと、敗戦後のドイツについて、現在の徴兵制、そして、

それを比較して徴兵制のある国、ない国について、同じ敗戦国同士である日本との違いを説明され、知らないこともありました。ピアンカさんからは、徴兵制の兵役代替ボランティアについてスピーチされました。これは、まず第二次世界大戦が終わったあとにでき、最初は自国だけで職種が少ないボランティアから始まり、福祉もでき、社会的に子供の育成のためなどでスポーツ、音楽などコーチとし教える多彩なボランティアが増え、これらの栄光から兵役代替が認められるようになったようです。また、自国だけでなく隣国や他の地域の遠征活動もできたようになりました。日本は小淵総理大臣の時に、大臣がドイツとの国交の会談で日本の遠征を認めたようです。そういう形で日本との繋がりが生まれて、日本人からもこのボランティアをドイツでできるようになりました。同時に他の国でも行われるようになりました。

ピアンカさんは10年程前に日本に仕事で来られ、そのとき、日本が気に入って日本に移り住み、日独のボランティアに入り、ドイツから来る人をサポートすることが自分の仕事であると主張し、とてもすばらしいスピーチでした。

代替で来られた新人3人は、どうして兵役代替でこの道を選んだか？なぜ日本を選んだか？今後ボランティアを卒業した後どうするか？心境を語ってくれました。しかも、彼らは日本語の勉強の一環として、わざわざ日本語で作文し上手な日本語で読み上げたものでした。終わった後は、ヤンさんと話をし、他の二人の方とも知り合うことができました。この場には、皿洗いの時で知り合った方、クリスマスパーティ、ニューイヤーパーティの方の皆様にも会うこともでき、本当に有意義な一日でした。

最後になりますが、私が今回体験したことは、偶然が偶然を呼び、話がトントン拍子に進み、様々な活動と出会いがありました。日独平和フォーラム北海道を通して知り合った方々より、他のボランティア、一日アルバイトなど、紹介されました。たとえば、皿洗いで知り合った川口君の先輩より、彼の会社の、滝野公園の環境アンケート調査係のアルバイトも経験しました。

振り返ってみるといろんなことを体験し、本当に良い経験ができました。印象に残った事は、様々な人に出会い、会話ができたことで、自分のこれからの生き方の参考となり、また今まで気づけなかった相手のことを知り、それを自分と照らし合わせたとき、新たな自分を見出すことになりました。相手に自分の存在感を示すことができるようになり、他国の社会性を養うことを学んだことは素晴らしく有意義なことでした。今後、チャンスがあれば、またチャレンジしてみようかと思っています。ボランティア活動を通して、ドイツに留学してみたいという大きな夢をもつ事ができました。《Vielen Dank! / Auf Wiedersehen!》

◆◆教職員の動向◆◆

《教員》

1月5日

<死去>

助教授 野澤謙治(情報メディア学科)

3月31日付

<退職>

特任教授 吉田迪弘(情報メディア学科)

特任教授 若林久二(情報メディア学科)

助教授 金義鎮(情報メディア学科)

<定年退職>

教授 藤家壮一(経営ネットワーク学科)

(4月1日付特任教授就任予定)

<定年延長>

教授 新保勝(情報メディア学科)

教授 浪田克之介(システム情報学科)

<辞任>

情報メディア学科主任 中岡快二郎

(4月1日付情報メディア学部長就任予定)

《職員》

3月31日付

<退職>

教務課長(兼)入試課長 加藤邦雄

◆◆11月～3月主要行事◆◆

◇法人本部◇

11月15日(火) 永年勤続表彰

2月24日(金) 理事会

3月 8日(水)～10日(金) 監査法人トーマツ「平成17年度期末監査」

29日(水) 理事会

◇大学院◇

11月28日(月) 研究科委員会

1月18日(水) 研究科委員会

20日(金) 大学院産官学連携セミナー(札幌サテライト)

2月11日(土) 大学院入学試験(二次募集)

23日(木) 修士論文公開発表会

3月 1日(水) 研究科委員会

7日(火) 修了者発表

24日(金) 研究科委員会

◇大学◇

11月 2日(水)～4日(金) MOS講習会<Word>

11日(金) 経営情報学部教授会

18日(金) 情報メディア学部教授会

20日(日) 推薦入学試験

25日(金) 全学教授会

12月 1日(木) 特別講演会「国際会計基準の日本経済への影響」

9日(金) 情報メディア学部教授会

10日(土)～11日(日) 公開講座「コンピュータで年賀状を作ろう」

16日(金) 経営情報学部教授会

17日(土) 情報メディア学部3年次編入学試験

23日(金)～1月5日(木) 冬期休業

6日(月) 全学教授会

1月 6日(金)～7日(土) 補講期間

10日(火) 臨時経営情報学部教授会

13日(金) 経営情報学部教授会

15日(日) 特別AO入学試験(A日程)

16日(月) 後期授業終了

17日(火)～26日(木) 後期定期試験

20日(金) 情報メディア学部教授会

21日(土)～22日(日) 大学入試センター試験

27日(金) 全学教授会

30日(月)～2月2日(木) 冬期集中授業

2月 2日(木)～3日(金) 一般1期入学試験

6日(月)～8日(水) 後期追試験期間

冬期集中授業

10日(金) 経営情報学部教授会

16日(木)～18日(土) 後期再試験期間

17日(金) 情報メディア学部教授会

23日(木) 全学教授会

28日(火) F D研究会

3月 1日(水) 講演会「著作権に関する講演会」

6日(月) 臨時経営情報学部教授会

臨時情報メディア学部教授会

7日(火) 卒業生発表

11日(土) 情報メディア学部3年次編入学試験

13日(月) 一般2期入学試験

14日(火) 経営情報学部教授会

情報メディア学部教授会

17日(金) 学位記授与式

24日(金) 全学教授会

25日(土) 特別AO入学試験(B日程)

◇通信教育部◇

11月24日(木) 山形大学視察団来学

12月20日(火) 鹿児島教育センター大学見学

3月 1日(水) 広島教育センター大学見学

◆◆主な来学者◆◆

11月11日(金) タイ王国教育省視察団(7名)

◆◆広報活動◆◆

<北海道情報大学通信教育部入学説明会:本学独自>

11月:1会場(新潟)

12月:4会場(名古屋、大阪、東京、本学)

1月:1会場(福岡)

3月:2会場(本学、東京)

<北海道情報大学通信教育部合同入学説明会:私大通教主権>

2月:13会場(東京(2)、名古屋(2)、神戸、広島、大阪(2)、岡山、横浜、札幌(2)、仙台)

3月:4会場(東京、新潟、福岡(2))

<進学相談会>

11月:北海道13会場(小樽、滝川、富良野、札幌、旭川、北見、釧路、帯広、留萌、岩見沢、留寿都、伊達、函館)

12月:北海道 7会場(千歳、苫小牧、札幌、帯広、釧路、旭川、北見)

1月:北海道 6会場(網走、枝幸、紋別、中標津、大樹、浦河)

2月:北海道 5会場(八雲、名寄、稚内、江差、函館)

3月:北海道 6会場(室蘭、帯広、釧路、根室、北見、旭川)

<高校内ガイダンス>

11月:北海道 7校(札幌新陽高校、旭川南高校、江別高校、札幌篠路高校、恵庭南高校、旭川大学高校、北星学園大学附属高校)

12月:北海道 6校(札幌創成高校、札幌北斗高校、室蘭清水丘高校、札幌丘珠高校、伊達緑丘高校、札幌第一高校)

1月:北海道 1校(石狩翔陽高校)

2月:北海道 2校(愛別高校、帯広南商業高校)

3月:北海道 2校(旭川藤女子高校、白樺学園高校)

<高校出張授業>

11月:北海道 2校(江別高校、帯広大谷高校)

<高校訪問>

11月:北海道110校

12月:北海道243校

2月:北海道124校

3月:北海道162校

<オープンキャンパス>

11月 6日(日) 本学

3月26日(日) 本学

<教員対象大学説明会>

12月 9日(金) 本学(16校16名)

<広報室来学者>

11月21日(月) 清里高校(大学見学会:学生4名)

12月 6日(火) 北広島西高校(大学見学会:学生23名、教員1名)

1月11日(水) 厚岸潮見高校(教員1名)

2月 1日(水) 札幌創成高校(大学見学会:学生40名、教員2名)

2月22日(水) 釧路西高校(教員2名)

編集後記

学内報『ななかまど』が編集方針と紙面のフォーマットを変え、配布先を学生諸君の保護者や同窓生、さらに広く学外者にまで拡大して、早くも2年が経過しました。新生7号目となる今号では収載記事も2倍強にまで増大し、本誌を熱心に読んで下さった方々からは評価と批判の言葉をいただいています。『ななかまど』が今後も本学と一人でも多くの読者のみなさんとを結ぶ有意義で楽しい場であるよう務めたいと思います。(N)